



いとう



海援隊旗(二隻の旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

# 秋 天 SYUTEN IPPEKI 一 碧

## 「龍馬の真髓 -龍馬は何者? Who is Ryoma? -」展

令和5年10月13日(金)～令和6年1月8日(月・祝)

### 坂本龍馬のイメージ

龍馬は明治時代前半の自由民権期には自由の先駆者、日露戦争から第二次世界大戦終結までは海軍の守り神、戦後には平和を愛する人、というように、時代が変われば龍馬のイメージも変わってきました。

現代では様々な龍馬のイメージがあり、以前、龍馬ファンの会合に出席していた時、ある方が「100人いれば100人の考える龍馬がいて良いのだ」と言ったことに対して、会場から大きな拍手が起こったことを鮮明に覚えています。



汗血千里駒(後編)

### 展示のねらい

歴史学は残っている資料などを調査研究して、事実を明らかにしていくものですが、一人の人間を完全に理解できるものではありません。現代では映像やインターネット、SNSなどが発達し、情報が溢れています。それでも現代の有名人の考えを正確に理解することは不可能です。対象が160年ほど前の人物ではなおさら不可能です。

### したがって、龍馬ファンの方々

は、史実として分かっている部分は史実として捉え、分からない部分をそれぞれが推測で補って楽しむため、100人いれば100通りの龍馬が生まれるでしょう。龍馬は、多くの人に愛されている人物であるが故に、想像で膨らんだ部分が多すぎて、現在では史実との境界線が曖昧となっています。

本展は、こうした分かりづらさを整理し、資料から読み取れる龍馬の真の功績を明らかにするとともに、龍馬の志や人間性、趣味などを紹介して、龍馬の真髓に迫ることを目的としています。

### 坂本龍馬とは何者か?

龍馬は武士であり、経営者であり、戦略家であり、調整役(コーディネーター)でもありま

す。様々な顔を持っています。そのため、どこを切り取って見るかで大きく印象が変わります。

その龍馬の功績は、ご存じのとおり、薩長同盟の仲介や大政奉還を成功に導いたことが挙げられます。小説などではこれらの事業を、龍馬が中心



慶応2年12月4日坂本権平一同宛て 龍馬書簡(部分)

となつて押し進めたこととして、英雄のように描くこともありますが、龍馬の真の役回りは調整役であり、影の功労者です。

スポーツでも社会の仕事でも、大きな成功の裏には必ず影の功労者がいるもので、その功績を一番理解しているのは、当事者たちです。その功績は表の資料には残りづらく、年月が経てば当事者以外からは忘れ去られます。しかし、龍馬の場合は例外で、影の功績を誇張して英雄化されてきたため、逆に真実が見えづらくなっています。

近年では、龍馬が公の資料に登場しないからといって、影の功績まで否定する動きもありますが、これも正しくはありません。非常に優秀な調整役であることなどを、展示からご理解いただきたいと思います。

三浦夏樹

# 特別展「花と歴史の爛漫土佐」を振り返って

高知が生んだ世界的な植物分類学者・牧野富太郎博士が主人公のモデルであるテレビドラマ「らんまん」(NHK)の放送開始は、高知県にとって大きな話題でした。

さて、高知県にとって、もうひとつ大きな話題となったのが、当館や坂本龍馬像が立地する桂浜公園の約40年ぶりのリニューアルです。

この2つの話題にちなんで企画、開催したのが特別展「花と歴史の爛漫土佐」です。第1部(4月28日〜7月2日)「桂浜シン発見―浦戸湾歴史探訪」、第2部(7月15日〜10月2日)は「月と龍馬の桂浜―坂本龍馬像物語」の2部構成でお届けしました。

第1部のテーマは「浦戸湾の歴史を辿る」。浦戸湾は、その風光明媚な景色を多くの文人が親しみ、近代以降も観光地として知られる地でした。戦後には、宅地開発や埋め立てなどで景色も変わってしまいましたが、珠玉の歴史エピソードが点在する美しい浦戸湾の魅力を、様々な資料

でご紹介しました。

第2部では、今年で95周年となる桂浜の「坂本龍馬像」の建立にまつわるエピソードを紹介しました。坂本龍馬像を建てようとしたのが、入交好保さんをはじめとする4人の大学生たち、そして、土佐の交通王、野村茂久馬、陸援隊の元副隊長で宮内大臣の田中光顕らが協力し、多くの銅像を手がけた彫塑家・本山白雲が製作した…ということは、ご存じの方も少なくないでしょう。こうした「情報」をお客様に伝えるには、どんな資料を展示したらよいか…。資料のセレクトが成功したかどうかは、お客様の判断ではありますが、展示機会の少ない当館収蔵資料をご紹介できたことはよかったです。と、少しエヘンの顔して、思っております。

「らんまん」はどう絡んだのか?と思われていることでしょう。県立牧野植物園のある五台山からは、「吸江図」などの絵画でよく

描かれる浦戸湾を一望する構図に似た眺めを楽しむことができます。県立牧野植物園↓五台山↓浦戸湾一望↓吸江図…というつながりで、第1部では、五台山で採集した牧野博士の植物図を紹介しました。

そして、第2部では、牧野博士の借金返済にも、龍馬像の資金集めにも一肌脱いたのが田中光顕、と牧野博士と龍馬像の共通点、というエピソードを紹介し、坂本家の家紋につかわれている「桔梗」を、牧野博士が描いた植物図により紹介しました。

最近、小説や映画をあらすじや早送りで見たりすることが流行しているそうです。

「情報入手」という点では「コスパ」「タイパ」がよいのですが、「鑑賞」という点では味気なさを感じます。「話題の場所に行ってきました!」という旅だけでなく、観光バスの行かないような、浦戸湾のような隠れた名所で自然や歴史を感じるような旅

も、たまにはいいのではないかな、と思います。

今回の特別展で、桂浜や浦戸湾をまた訪ねてみよう、と思っただけであれば幸いです。

**\*展示内容をご紹介した「小冊子」をミュージアムショップで販売中です。通信販売でもご購入できます。**

河村章代



第2部の展示の様子



# りょうま館の夏休み〜夏のファン感謝デー〜

8月9日から27日まで、「りょうま館の夏休み〜夏のファン感謝デー〜」と題して、シーズナルイベントを開催いたしました。約2週間に及ぶ長期間のイベントは当館としては初めての試みでした。今回はいくつかピックアップして、イベントの模様をご紹介します。

まずは「りょうま館の展示紹介」、こちらは常設展「坂本龍馬の生涯と幕末」の展示解説を学芸員が行いました。常設展のなかでも必見資料を中心に30分ほど解説し、各回15名〜20名前後参加いただきました。どなたも熱心に展示を見ながら解説を聞いていただいた様子がとても印象的でした。

イベント期間中2日間だけ実施したのは「なりきり龍馬撮影会」と「よさこい演舞」です。

龍馬の衣装着用体験と、本館2階にある近江屋での記念撮影会は、特に県外のお客様に好評でした。プロのカメラマンが撮影とポーズの提案を行いますので、最初は控えめだった方もどんどんポーズを決めてくださり、とても楽しい様子に私たちも



なりきり龍馬

嬉しくなりました。

「よさこい演舞」は今年のもよこい祭りで地区競演場連合会奨励賞を受賞した「上町よさこい鳴子連」と、大賞を受賞した「とらつくよさこい(ちふれ)」さんに当館へお越しいただき、演舞とレッスンを行いました。間近で見える演舞は圧巻で、どちらのチームも、りょうま館の夏を熱く盛り上げていただきました。

「幕末瓦版づくり」と「工作教室」、こちらはお子様を対象にした企画です。夏休みの宿題や自由研究に役立てていただけたらという思いで開催したところ、この企画も目当てに来館いただいたお客様も多く大盛況となりました。「幕末瓦版づくり」はまず学芸員の展示解説をもとに参加者自身でテーマを決めていただき、選んだテーマに



上町よさこい鳴子連

ついて当館の図書を利用しながら調べ学習を行い瓦版を完成させるという企画です。テーマは龍馬の暗殺や脱藩を選ぶ方が多く、同じテーマでも切り口によって瓦版の内容も異なり、私たちも発見がありました。

工作教室では、紋切り遊びやパズル・缶バッジづくりを行いました。紋切り遊び、いわゆる切り絵ですが、難易度が幅広く、難しいものは一緒に参加いただいた親御さんのほうが夢中になってしまいくらいでした。作成した紋切りは画用紙に貼ってラミネートして下敷きやコースターにしてお持ち帰りいただきました。インターネットで「紋切り」



幕末瓦版

を検索すると、図案や折り方の説明をしているサイトもありますので、気になる方は是非お家時間に遊んでみてください。

他にもくじ引きやクイズラリーなど、たくさんの方に参加いただいで、りょうま館の夏休みは無事に終了しました。次回は坂本龍馬の誕生日で当館の開館記念日でもある、11月15日の無料開館デーの前後にイベントを開催予定です。10月13日からは企画展「龍馬の真髄」展も始まります。皆様のご来館をお待ちしております。

竹田綾



## バスの車窓

8月の初旬、岡山発高知行き  
の高速バスに初めて乗りました。  
お盆近くの時分でしたので帰省  
の若者を中心に車内はほぼ満員。  
上天気で先頭の座席でしたから、  
フロントガラスからの光景がクリア  
に広がります。

中高時代は当時の国鉄で須崎  
駅を利用して鈍行列車で通学し  
ていました。何の自慢にもなりま  
せんが、早朝発にもかかわらず  
6年もの間、列車内で居眠りを  
した記憶がありません。

バス車内のほとんどの乗客の方  
が寝静まっておられました。ずつ  
と前面の光景と、右斜め前の若  
手ドライバーのふるまいを眺めて  
おりました。当日は風が強かった  
ので瀬戸大橋には横風注意のサイ  
ンが表示されていたものの、ずつ  
と安定走行が続きます。

高松道に入つてもない頃にハ  
ブニングが発生します。追い越し  
車線を走行中のその時、左側車  
線のすぐ前方の普通乗用車が風  
に煽られたのでしょうか、スーとほ  
ぼ真横に滑るかのようにバスの前  
を横切り始めます。そして対向  
車線との間のガードレールに衝突  
しかかる寸前のところで立て直し

ましたが、「うあつ」とヒヤリとし  
た場面でしたし、バスが並走して  
いたらと思うと「ぞつ」ともしま  
した。この突然の出来事を目撃  
したのは多分、ドライバーと私の  
二人だけであつたかと思いますが、  
ドライバーの対応は終始、冷静で  
ありました。

その後の走行中に「運転手、ト  
イレ休憩をいたします」とのアナ  
ウンスがあり、サービスエリアに立  
ち寄るのだろうとバスを降りる準  
備をしていましたら、停留所にバ  
スを寄せて車内のトイレを利用さ  
れました。余り見かけることな  
い休憩シーンですので、横風やハ  
ブニングの影響もあつたのだろうな  
と納得しました。

いよいよ高知道に入ると今度は  
お天気のハブニングです。それま  
で上天気でしたのに、四国山地の  
トンネルを次々と抜けるたびに天  
気が急変し厚い雨雲が立ち込め、  
ついには強い雨が  
降り注ぎ視界も  
低下します。いつ  
も思うことなの  
ですが、本県は前  
方に太平洋が広がり、  
後方には四国山地  
がそびえるという、  
他県からごそつと  
隔絶された地勢に  
あつて、高温・多雨・

多湿のモンスーン気候の天命を  
実感させられます。

けれどもこのように、さながら  
中国の梁山泊を思わせるかのよう  
な地勢の中で歴史を紡いできたか  
らこそ、人恋しくて、暑苦しいほ  
どあつたかい県民性や、皿鉢料理  
と献杯といった独特の文化が育ま  
れてきたのだろうと、ひとりご  
ちました。

乗車率がほぼ100%でした  
ので、岡山出發が遅れざるをえ  
ず、道中の横風とハブニングや途  
中休憩なども交わつて到着時間に  
遅れが生じましたが、ずっと巡航  
スピードがキープされていました  
のでストレスを感じることはありません  
でした。

いずれにしても「バスの車窓」か  
らは、初体験にしてはスリルと感  
慨を覚える光景の連続で、やは  
りついぞ眠ることもありませんで  
した。



## 新職員紹介

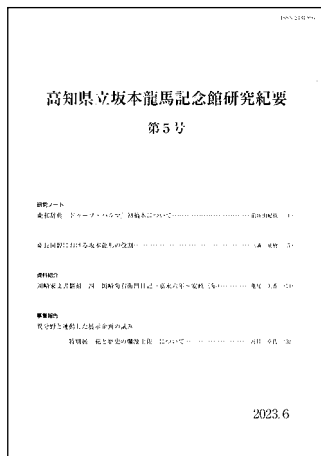


竹田 綾

6月より坂本龍馬記念館で勤務して  
おります。昨年Uターンで高知県に戻っ  
てきて、縁あって企画・広報として記念館で  
働けることになりましたが、まだまだ坂  
本龍馬や幕末の歴史の知識が浅い自分  
にとっては勉強の日々です。

県外だけでなく、県内の皆さまにも改  
めて龍馬を知っていただき、記念館に来  
館いただけるように努めてまいります。  
よろしくお願いたします。

『高知県立坂本龍馬記念館研究紀要 第5号』を発行しました。  
学芸員の研究成果を掲載しているもので、毎年発行しています。  
執筆者およびタイトルは以下の通りです。



- ・「蘭和辞典『ドーフ・ハルマ』初稿本について」  
前田由紀枝
- ・「薩長同盟における坂本龍馬の役割」三浦夏樹
- ・「岡崎家文書翻刻 四 岡崎菊右衛門日記  
(嘉永六年～安政三年)」亀尾美香
- ・「異分野と連動した企画展示の試み—特別展  
「花と歴史の爛漫土佐」について」河村章代

A4版56頁、700円。  
当館ミュージアムショップでお求めください。  
当館HP「ミュージアムショップ」内にて、通信販売  
も行っております。

記念  
講演会

# 「浦戸湾の歴史をたどる —浦戸湾風景絵巻を中心に—」

高知県立高知城歴史博物館学芸課長 藤田 雅子 氏



藤田氏

桂浜から城下堀詰に至るまでの道のりが一つにまとめられて描かれた絵巻「浦戸湾風景」(高知県立高知城歴史博物館蔵、以下「城博」と略記)。その特徴や意義はどのようなものであったのだろうか。山内家に伝わった本絵巻の作者は不詳だが、地形や描法から江戸時代後期のものと推定される。また本作以外にも県内には同場面を描いた絵巻や内湾を描いた「吸江図」が複数確認されており、浦戸湾の風景が当世人気の画題だったことがうかがえる。

浦戸湾風景の需要と供給のあり方が窺える好資料として、江戸後期の文人画家、楠瀬大枝の日記「燈袋」(高知市民図書館蔵)が挙げられる。そこには城下豪商で「南路志」を編さんした美濃屋忠五郎(武藤平道)から大坂

行の土産産にと吸江図の注文を受けたり、藩主から内々の依頼で土佐名勝図の下図を制作したりと、浦戸・吸江を題材とした絵巻の制作依頼に関する記事が複数見られる。これは浦戸湾の風景が地元文化人から需要が高い画題であった証左であり、その背景には当時の全国的な名所図会への需要の高まりが追い風となっていたであろうことも想像に難くない。

こうした浦戸湾風景絵巻の制作背景と文化的需要のあり方をふまえた上で、以降は歴史資料として各場面を読み解いて行きたい。浦戸湾の機能は、大きく三つに分けられる。第一に、土佐藩の中心拠点である高知城へ至る玄関口としての機能である。江戸幕府の浦々巡見に対応するために土佐藩が用意した「寛文七年対巡見使差出国絵図」(城博蔵)には、土佐湾の航路や寄港先となる港の情報が書き込まれている。そこでは「干潮(之時)船出入難成」とあり、潮位によっては船の通行が難しかったことが分かる。複数の河川から流れ込む土砂の堆積に加え、岩礁が点在することがその原因で、絵巻でも湾口には岩礁が、河口付近には砂地で人々が潮干狩りを楽しむ様子が描かれている。幕末に高知を訪れた英外交官アーネスト・サトウも、湾内は吃水の浅い船しか通行できず、途中で船を乗り換えたことと記す。こうした浦戸湾の特徴は、容易に湾内へ船を侵入させない、

天然の要塞と言え換えることができよう。慶長元年に起きたサン・フェリペ号事件では、遭難した外国船を湾内に引き入れる途中で座礁・大破している。良港とはとても言えないが、裏を返せば軍船・大船による部外者の侵入が難しく、城下防衛の観点からは優れた地形との見方もできる。

二点目は、都市住民の行楽地としての機能である。先述の通り浦戸湾は名所・景勝地を描いた風景画だが、そこには行楽を楽しむ人々の姿を各所に見ることができ、特に注目したいのが、孕周辺である。孕山には江戸中期、五代藩主豊房が桜を植えて以来藩の保護を受け、桜の名所へと成長した。城下の人々が季節になれば花見に繰り出し、宴会や歌会を行う様子は当時の日記にも見え、浦戸湾が都市住民の行楽や文化的な活動の場であったことが読み取れる。

最後に、都市住民の生活を支える、近郊農村・漁村としての役割について説明したい。浦戸湾は、一大消費地である高知城下町の近郊という地の利を生かし、その需要を満たす生産地の側面も有していた。絵巻でも、魚を捕る漁師達の姿や塩田で働く人々の姿が見て取れ、さらに五台山・吸江村では機織りをする人の姿も見える。

都市近郊農村・漁村は商品消費地に届ける上で距離的に有利だが、加えて水上輸送の便利の良さが流通の円滑化に貢献し

ていた。中でも城下郭中に至る堀川は輸送・交通上、最も重要な水路である。正保城絵図など江戸中期までの絵図類では九反田と材木町の間に土手があり、水路が一度途切れていて迂回または積み替えの必要があった。しかし絵巻にはこの土手がなく、城下町まで直線的な水路で運び込むことができるようになってきている。風いだ浅瀬の続く浦戸湾は大船の通行は困難だが、庶民が小舟を操り生活に使用するには適しており、守りやすく暮らしやすい環境を城下・周辺住民に提供していたのである。

以上のように浦戸湾風景絵巻を手がかりに江戸時代における浦戸湾と沿岸部の持つ機能を紹介してきたが、最後に本作にこれらの要素を盛り込んだ意義を考えて結びとしたい。

中世までの土佐は、浦戸湾よりも東に政治の中心地である国府や守護の拠点があった。そのため前述した浦戸湾の機能はすべて、山内家が本拠地と定め、城下町を発展させたことでこそ意味を持ったと言える。本作は土佐の豊かな自然と文化・経済の繁栄を細部にわたって描いている点が見所である。その背景には、長きにわたって太平の世を守り、土佐藩を発展させた山内家の治世への賛辞、他国の都市や景勝地にも劣らないと誇る郷土への愛着があり、だからこそ当時の人々に愛された題材となったのではないだろうか。



# 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 総会・研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会総会は6月17日、坂本龍馬記念館新館ホールにおいて、第15回総会・研究発表会を開催した。

昨今の新型コロナウイルス流行状況を鑑み、総会は昨年と同様書面決議とし、昨年度事業報告、今年度事業計画とも承認された。



研究発表会では会員2名による研究発表を午前・午後に行なった。午前の第1部では会員の網屋喜行氏が、「海南政典」の官僚制について報告した。午後の第2部では、龍馬記念館との共催行事として、高知県立高知城歴史博物館の藤田雅子学芸課長を講師に招き、開催中の特別展「花と歴史の爛漫 土佐第1部 桂浜シン発見―浦戸湾歴史探訪」にからみ、浦戸湾風景絵巻を読み解く講演会を開催した(網屋氏・藤田氏の講演の様子は、7月15日〜31日の間、龍馬記念館HPで配信)。続いて副会長の渋谷雅之氏が、慶応三年のいろは丸事件についての研究報告を行った。

## 当日次第

【テーマ】

「龍馬研究の水準を高め、龍馬の真実を追究し、その精神を現代に生かそう」

### ◆日時

2023年6月17日(土)

9時30分〜16時30分

### ◆会場

高知県立坂本龍馬記念館  
新館ホール

### ●9時30分

総会(書面決議報告)

### ●10時 第1部 研究発表会

「海南政典の、ほぼ50年ウエーバーに先行した「官僚制」とその構築に向けた吉田東洋の思索過程」

### ●13時30分 第2部

・会長挨拶  
・来賓挨拶  
高知県教育次長 竹崎 実氏  
高知市教育長 松下 整氏  
・龍馬記念館令和5年度特別展記念講演会

「浦戸湾の歴史をたどる  
―浦戸湾風景絵巻を中心に―」

藤田雅子氏(高知県立高知城歴史博物館学芸課長)

### ●15時 研究発表会

「いろは丸の急用」

渋谷雅之氏(現代龍馬学会副会長)

## 総会書面議決のご報告

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2023年度の事業計画や予算等の総会審議事項については事前に書面議決を行いました。  
その結果は次の通りです。

会員数 92名

第1号議案(1)(2)(3)

承認70名 回答なし22名

第2号議案(1)(2)

承認70名 回答なし22名

第3号議案

承認70名 回答なし22名

以上により規約第9条(議決)に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館 現代龍馬学会  
会長 宮 英司

## 研究発表会

海南政典の、ほぼ50年ウエーバーに先行した「官僚制」とその構築に向けた吉田東洋の思索過程

現代龍馬学会会員・鹿児島県立短期大学名誉教授・吉田本家末裔

網屋 喜行

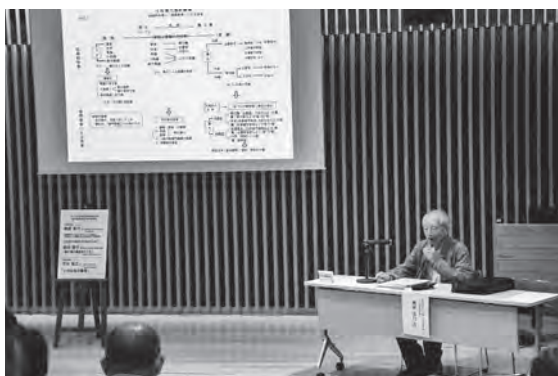
石尾芳久氏は、ドイツの歴史学者であるマックス・ウェーバーの「官僚制論」を分析道具にして、吉田東洋が編集した「海南政典」について画期的な研究を行った。ウェーバーは一八六四年生まれつまり東洋没後の人物なのであるが、石尾氏の研究を読んでいると、東洋が、ウェーバーの官僚制をあらかじめ知っていたかのような錯覚に陥ってならない。そうした私自身の錯覚を打ち砕くというのが今の問題意識で、本報告はその試論である。

東洋は、「海南政典」で、土佐藩官僚制の改革を企てた。山内氏が掛川から持ち込んだ「土佐藩官僚制」は、もともと幕府のそれに倣うものである。江戸時代の大名は土地と人民を私有したが、政治用語ではこれを「家産国家」といい、そのための組織を「家産官僚制」と呼んでいる。

土佐藩の職制では、「近習」「外輪」の下に、それぞれ官僚

制が構成され、一般的に、藩士は「家柄」に応じて相応する役職に就く。『高知県史 近世史料編』によると、「上士」に属するのは家老十三人、中老十一人、馬廻三九六六人（家臣団の中核）、小姓組・留守居組三四一人である。一方、「下士」に属するのは郷士・徒士・徒士格・組外・足輕の五階層であるが数は不明。さて、馬廻である東洋は、家柄以上の役職である仕置役に就く。これは、藩主豊信が特別に抜擢したものであるが、東洋自身は、有能な人材の「家柄」に由らない登用制度を目指していた。

文化十三（一八一六）年生まれの東洋は、弘化二（一八四五）年、三十歳の時に、藩主豊熙へ建白書「時事五箇条」を提



出する。このなかで、東洋は、家柄に拘らず有能な人材を登用することを提唱するが、これは後に「海南政典」で制度化されることとなる。嘉永五（一八五二）年には、藩主豊信の命により「北条泰時論」を執筆。悪人であった泰時が執権就任ののち前非を悔い、政治の道に邁進したことを論ずる。翌六年、東洋は大目付に就任、次いで仕置役に抜擢された。以後、東洋は、年譜上では時期が特定できないが、合計十一編の「史論」を執筆した。その内訳は、古代中国が六編、日本が三編でうち一編は藤田東湖宛の書簡論文である。東洋は特定の君主を論じること、のちに「海南政典」で提唱する人材登用の足固めをしている。なお、東洋は、「史論」を齋藤拙堂や塩谷

后陰らの学者にも見せて批評を仰いでいる。

東洋の「遺稿集」が残っている。半分ほどはエッセイ、あと半分は政治日誌である。後者は多くの学者が研究で利用しているが、前者はあまり利用されていない。それは、全てが漢文の「白文」であり、読みにくいと思われるが、今後はエッセイ部分の読解・研究が必須である。

さて、「海南政典」における「外朝官」「内朝官」は、石尾氏

の研究によると、中国の古典である「周礼」が典拠である。「周礼」には、「外朝官」が万民に国の重大事項（「国危」「国遷」「立君」）を諮問すべし、という一文がある。東洋は、人材登用の理念としての「外朝官」制度に着目した。また、「小禄者」抜擢のため導入した「官秩制」は、幕府の「足高の制」に由来していた。そして、「海南政典」官僚制の根幹たる「藩政と家政の分離」は、東洋の暗殺で一旦は否定されたものの、明治政府が「藩治職制」で制度化したことでよみがえったのである。

## いろは丸の急用

現代龍馬学会副会長・徳島大学名誉教授

渋谷 雅之

慶応三年四月、坂本龍馬は竹島（鬱陵島）を開拓し、行き場を失っている脱藩浪士を送り込み、それぞれに生きる途を与えようとしていた。ところが四月十九日、龍馬ら海援隊士の乗ったいろは丸は方角違いの上方に向けて長崎を出港する。この日出発をひかえた坂本龍馬と後藤象二郎による金銭上のやりとりが岩崎彌太郎の日記記録された。龍馬の「金せびり」という、やや微笑ましい話として有名なものである。

大坂への出発にあたり、後藤象二郎は海援隊士十六人に対し、一人五両見当の給与百両を与えた。これに対して龍馬は「それは海援隊士に対する給与だろうが、隊長たる自分に対してはどうしてくれるのか？」と岩崎彌太郎にねじ込んだ。これに対して後藤は「その話は決着済みなので、支給するにはおよばない」と突っぱねる。龍馬は引き下がらず、「此度登坂ハ無余儀事」なので、ぜひとも別に五十両借用したいと食い下がった。今回の大坂行きは自分の意志ではなく「やむを得ず」行くのだから、五十両くらい支給するのは当然だ、といった、言わば後藤象二郎の「足下を見た」主張なのである。彌太郎は、仕方なく自分のふところから「餞別」という名目で五十両を龍馬に渡す。

ここに書かれた「余儀無き事」とは何だろうか？一つ思い当たることがある。それは後藤象二郎が龍馬に命じて、山内容堂または薩摩の小松帯刀ら、もしくはその両方に対する書状を届ける……といった用務である。後藤象二郎にとって、京都で自分を待っているであろう山内容堂や、後藤の登場を待ち構えているかもしれない薩摩の小松や西郷に対して何らかのアクションが必要だっ

たはずである。そうした情報の伝達は通常の飛脚では時機を失する恐れがあり、また機密性の点で不安があったであろう。龍馬がいろは丸で運んだかも、知れない書状の内容としては、竹島渡航に関して容堂に対する事情報告や、四侯会議とその後の政局に向けた土佐藩の方向など、さらには後年「船中八策」という名で有名になった土佐藩の新政府構想のことなど、考え得ることはたくさんある。

そしていろは丸は四月二十三日の深夜、瀬戸内海の六島付近で紀州藩船明光丸と衝突して沈没する。そこに至るまで、いろは丸事件に関しては幕末の尊皇攘夷思想や華夷思想と関連して膨大な政治的背景がある。それらの詳細については、今後発刊が予定されている「現代龍馬学会論集」において述べたい。





# 一周まわって龍馬は良い人

宮川 禎一

最近の龍馬評価の変遷問題を書いてみたい。読者の皆さんはどの項目であろうか？

①坂本龍馬は薩長同盟成立や大政奉還に深く関わって明治維新の扉を開いた凄い英雄だ。尊敬します。

②いやいやそんな訳がない。ただの薩摩藩のバシリで、ほとんど何もしてない。司馬遼太郎が書いた幻想に皆さん騙されないで。

③龍馬は相当な策士であって陰で寝技を繰り返したとても悪い奴だ(けなすふりをしながら褒めるといふ高度な評価術)。

④一周まわって実は良い人だった。筆者は③なのだが、ここでは④を書いておこう。坂本龍馬は良い人説だ。後世の人間は龍馬のことを上げたり下げたりする。墓の中の龍馬は「俺に会ったこともないヤツがまたなにか言ってるよ」と思っているだろう。

確かに良い人は本当に良い人であるのか分からない。悪い人も知れない。悪い人もそうだ。実は良い人も知れない。百五十年を経てもそうなのだから「人は時間を経ても正しく評価できない」が正しいのだから。時を経てその人物の評価が定まる、とは無縁な龍馬だ。たぶん他の人物もそうなのだ。

熊本の道家家文書の慶応二年六月頃と推定されている書状に出て来る「坂下良馬」の評価はこうだ。「良馬は別而(わけて)順良之人物之由」である(第三十一回熊本大学附属図書館貴重資料展『細川家臣・道家(どうけ)家の幕藩初期と明治維新』解説目録の十五頁 平成二十七年)。名前のとおり良い馬である。解説文によれば「熊本藩と関係が深い越前藩の書生が龍馬と行動をともにしている関係で入ってきた情報であるらしい」とある。横井小楠が肥後出身で越前藩と関りが深いからだ。

同時代の人がそう書いているのに、百五十年後の現代人が「悪い奴に決まっている」などと思う不思議さは人間の不思議だ。当時の人が良い人だと記そうが「そんなのは嘘だ」と現代人が思う面白さだ。こう書く「歴史とは何か」に至る。自分が思うことが正しい歴史だ。そう思う自分がそこにいる。唯識論である。今回は「一周まわって龍馬は良い人」という話でした。



伏見寺田屋近くの「龍馬とお龍、愛の旅路」像の上半身。平成25年造立。

## 企画展

# 「龍馬の真髓 — 龍馬は何者? Who is Ryoma? —」展

10月13日(金) ~ 2024 1月8日(月・祝) 会期中無休

龍馬の手紙から「活躍」や「志」、「性格」、「趣味」を読み解きます



申込受付中

## 連続講演会 「さまざまな立場からみる幕末の京都」

第3回 幕府高官「京都所司代」再考

- 講師 上村香乃(当館学芸員)
- 日時 10月28日(土) 13:30~15:30
- 場所 新館ホール

「京都の守護」を裏のテーマに、移り行く幕末の世の過渡期とも言えるべき開国期の京都について、従来から幕政に携わってきた京都所司代の立場から再考します。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会  
〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015  
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp



# 龍馬の手紙

20

## 浮世の値

婚家との不和が生じ自棄を起こす乙女に対し龍馬は「なんのうきよハ三文五厘よ。ぶんと。へのなるほどやつて見よ。死だら野べの白石」と手紙を送っている(文久三年(1863)六月二十九日付け)。この「三文五厘」には元ネタがあるようで、いくつかの滑稽本の台詞回しに「うきよは三分五厘」と世を侮み、値打ちのないことの意味で現れる(『日本国語大辞典』。「分」と「文」の違いはあがるが龍馬も愛読していたのだろうか。この浮世の値を「三銭」と更に低く見積もった男がいる。高杉晋作である。両者は深い親交を持ち、龍馬は親類に宛てた書状の中で「当時天下之人物」(慶応二年(1866)十二月四日付け坂本権平・一同あて)と晋作を絶賛している。しかし、晋作の晩年に龍馬の姿は見られず、二人は訣別したと考えられて

いる。似て非なる二人であるので、そうあつても不思議ではないと思う。

二人の違いは浮世の値に現れている。龍馬のいう「三文五厘」には、この世で生きる価値とはそれほど軽いものであり、そう思いつめなくてよいとポジティブな印象を与えるに対し、晋作は「億万の心魂が散り、愚者も英雄も共に白骨となった」いま、この世は「三銭」ほどの価値もないと言っており、ネガティブな印象を与える。

かつて同志であった二人の、根っこにある性分の違いが見えるこの浮世の値が私は好きである。

龍馬の底抜けの明るさは慶応三年(1867)十二月七日に陸奥宗光に宛てた手紙にも現れる。情勢が緊迫している中、「世界の咄し」をしようと宗光を誘い、「此頃おもしろき御咄しも誠に山々ニて候」とある。「面白きことも無き世に面白く」という晋作の理想を龍馬が体現していたようにも私は思うのである。

青井 恵理香  
(高知県立歴史民俗資料館 学芸員)

?

## Q&A

No.5

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

### 2館体制の成り立ち

Q. 新館はいつできたのですか?

A. 平成30年4月にオープンしました。

ご来館いただいたお客様から「新館はいつできたのですか? 前回来た時は本館だけだったと思うけど」とのご質問をよくいただきます。

何度も高知県および当館をご訪問いただいたからこそありがたいご質問です。

本館は平成3年の開館以来長らく「龍馬の殿堂」として県内外からたくさんのお客様をお迎えし、龍馬の魅力を発信して参りました。

しかし、資料の保存や展示に適切な環境とは言えず、本格的な博物館機能を備えた施設として新館がオープンしました。

また新館のオープンに合わせて大胆にリニューアルした本館は、映像やイラストを多用した体験型のコンテンツで皆様にお楽しみいただいております。

貴重な資料を広い展示室でゆっくりご覧いただける「新館」と、楽しく龍馬や幕末に親しみ、歴史に理解を深めて

いただく「本館」との2館体制で現在に至っております。

そして、開館以来30年以上経過した本館がこのほどJIA(公益財団法人日本建築家協会)制定の第22回JIA25年賞を受賞しました。この賞は「25年以上の長きにわたり建築の存在価値を発揮し、美しく維持され地域社会に貢献してきた建築」を登録・顕彰するというもので、記念館で働く私たちにとっても励みになり、喜ばしいできごとでした。

ようやく暑さも和らぎ、絶好の行楽シーズンの到来です。ぜひご家族おそろいで龍馬記念館にお越しください。お待ちしております。

米澤 まどか



## 以蔵の捕縛関連史料から考える

## 学芸員の視点

当館に所蔵されている「科書」<sup>しやがき</sup>。これは土佐藩京都藩邸史料の一つで、岡田以蔵に関する史料であり、その概要は以下の通りである。科、すなわち罪を書き記した罪状は、元治元（一八六四）年五月に書かれている。当時鉄蔵と称して浪人として京都に滞在していた以蔵は、二条東洞院西入町で糸商売をしていた幸次郎の店へ押し入り、金子を押借すなわちお金を無理やり借りよつとし、これが原因となり捕縛された。

処分を担当したのは当時京都東町奉行であった小栗下総守の同心齋藤安太郎であり、これにより科書が書かれた五月は東町奉行が月番であったと考えられる。なお、近世上方・京都の司法機構においてこのような場には京都町奉行の与力・同心が立ち会うのが一般的であり、これは幕末期においても変化が見られなかったと言えよう。

このようにして以蔵が捕縛された背景には、以下の出来事が挙げられる。元治元年二月、山城国中以下に以下の触が出されている。その触には「近來市在所々江強盜追剥之

類徘徊いたし、往來人を劫し、亦ハ手荒之所業杯および候者之内ハ召捕ニ相成候得共、今以在方ハ別而甚敷趣相聞へ候二付、追々嚴重御取締被仰付候義ニハ候へ共、兼而其所限申合置、右様之者共立入候ハ、早速出合互ニ相助ケ召捕可申、其時宜ニ寄手余り候ハ、切殺打殺候共不苦候、」とあり、これを「山城国中へ不洩様早々可相触もの」としている（京都町触集成第十三巻）。

すなわち、近來、市在所々へ強盜や追剥の類が徘徊し、往來人をおよぶ者は召し捕えになるけれども、今をもつて在方は別して甚だしいと聞くので、追々嚴重に取締を仰せ付けられることではあるが、あらかじめその所限で申し合わせおいて、このような者が立ち入ったならばさつそく出合い互いに助けて召し捕えるように、その時により手に余るならば切り殺し撃ち殺しても差し支えない、と触れられていたのである。そして、右のおもむきについて山城国中へ漏らさずよう早々相触れるべきものである、とされている。強盜・追剥に対して厳しい処罰が下されていた事実が窺い知れよう。さて、この触れが出された背景の一つとして、同年二月四日の事件が関係

していると考えられる。その内容は、追剥・強盜を行った高橋広龜とその徒党が捕らえられ、京都町奉行へ差し出されたというものである（京都守護職日誌第二巻）。当時京内では浪士が押借をすることは珍しくなく強盜などが横行していたとされており、その中でこのような事件が起こったため、対策として山城国全体へ触れられたと考えられる。八月十八日の政変で尊攘派が窮地に陥つたことから山内容堂が尊攘派の弾圧をはじめ、これにより勤王党の指示のもと天誅を繰り返していた以蔵にも嫌疑がかかり捜索の対象となっていたが、以蔵が捕縛されたのはこのような強盜・追剥対策という異なる背景からであった。

この後、以蔵は「洛中洛外払」すなわち京からの追放となる。その際に烙印が押されており、一般的に罪人にこのような処置がとられた。なお、烙印ではなく入れ墨のこともあったようだ。

さて、この一連の処置をより深く知ることが出来る史料が土佐藩京都藩邸史料の「大坂状況報告書状」である。その史料内には、「兼而日記又は大和之浪士下申談候書取杯持居候処、此度不殘御取揚二相成至極残念」という文言がみられる。

処罰対象となる勤王党の動向を知り手掛かりとなると考えられた日記または大和の浪士と話し合った書き取りが押収されて残念であると言われているのである。ここで考えたいのは、日記または書き取りを押収した主体であり、洛中洛外追放後に土佐藩役人に大坂で捕縛されたという事実経緯から、これらを押収したのは京都町奉行ら役人であると考えられる。このように、以蔵の捕縛関連史料から当時の京都における治安維持対策とその実態を窺い知ることができよう。



土佐藩京都藩邸史料 科書(写)



## ミュージアムショップ便り

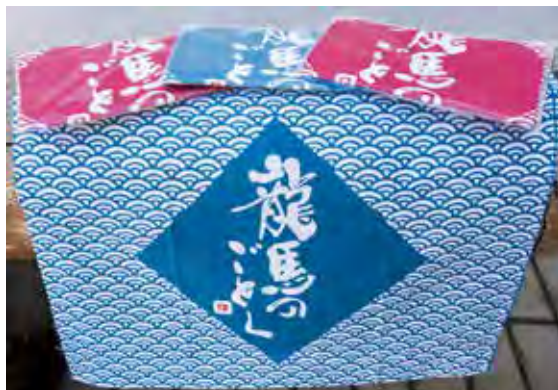
今回はアートの秋にちなんだ商品をご紹介します。

当館の本館2階には、龍馬に関連する作品を鑑賞しながら太平洋も眺められる海の見える・ぎゃらりいがあります。ショップでお取り扱いしているアイテムの中には、この“海の見える・ぎゃらりい”で作品を展示された作家の方々の関連商品が何点があります。今回はその中からセレクトして3点をご紹介します。

### 「龍馬ハーフ手ぬぐい“龍馬のごとく”」

1点目は、高知県出身の書家山沖春蘭さんの「龍馬ハーフ手ぬぐい“龍馬のごとく”」です。山沖さんの書には“インテリア”や“暮らし”をテーマにされた作品が多数あります。

本品は、日本手ぬぐいの半分のサイズに吉祥文様である青海波文様をあしらひ、中央には「龍馬のごとく」と美しく力強い文字が書かれています。赤色系と青色系の2色があり、本来の手ぬぐいとしてお使いいただけるほか、お好みでインテリアとして、また敷物としても趣があるのではないのでしょうか。



価格1,000円(税込)

### 「龍馬鶴おりがみ」

2点目は、兵庫県出身のイラストレーター楠本剛さんの「龍馬鶴おりがみ」です。楠本さんは大の龍馬ファンであり、様々なテーマの龍馬をイラストで描いたりお芝居や朗読劇などでも表現されています。

折り紙は、赤色・黄色・緑色・水色・青色・紫色の6色が入っており、鶴が出来上がるとなんと両羽に龍馬の家紋「組み合い角に桔梗紋」が現れます。平和の象徴である鶴と龍馬を結び付けたアイデアには、楠本さんの熱い思いを感じます。ぜひ龍馬鶴を飛ばたかせてみてはいかがでしょうか。

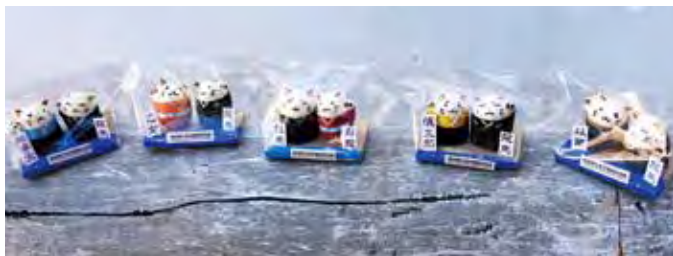


価格500円(税込)

### 「龍馬まねきねこ」

3点目は、高知県出身の美術作家国吉晶子さんを中心に運営されている造形教室のスタッフ、美術作家の井関さおりさんがメインで制作されている「龍馬まねきねこ」です。

2体が仲良く並んだまねき猫は、土佐和紙と紙粘土を素材に作られており、種類は龍馬とお龍、乙女、武市半平太、中岡慎太郎、岡田以蔵などがあります。1体ずつ手作り感溢れる表情や衣装、形をした愛嬌ある猫たちに微笑みかけられると、思わず手に取ってみたいくなるのではないのでしょうか。間近でご覧になってみてください。



価格880円(税込)

中村 昌代

## ■「海に見える・ぎゃらりい」

新館は、龍馬の書簡など貴重な展示資料に影響を与えないよう、温湿度も一定にし、光もできるだけ入らないようになっています。資料のための温湿度、照明なので、「ちょっと冷房が効きすぎでは?」「暗いなあ〜」という感想をもたれるかもしれません。申し訳ないと思いつながりながら、ご理解いただくようお願いするしかありません。

そうした博物館仕様の新館と渡り廊下とつながるのが本館です。本館2階は4面がガラス窓となっているため、新館とはうってかわって明るいことが特徴であり、魅力です。

その魅力を最高に堪能できるのが、一番南側の「海に見える・ぎゃらりい」なのです。ここからは窓越しに海を眺めることができます。窓枠があるので、まるで屏風のようにも見えます。

「海に見える・ぎゃらりい」は、企画展の関連展示などを開催する場所でもあります。特に、今年は年明けから開催している、お子様やご家族で楽しめるイベント「シーズナルイベント」では、ワークショップ会場にもなりました。4月末からの特別展の会期中は、県内の牧野博士ゆかりの地をご紹介する展示(前号でご紹介)の他、特別展関連企画として、「RYOMA爛漫」(5月27日から7月2日までの毎週末)、「りょうま館の夏休み」(8月9~27日)、「坂本龍馬湿板写真〜りょうま館の週末は面白い!歴史のロマンを体感しよう!〜(9月16~18日)」を開催、「海に見える・ぎゃらりい」では「缶バッヂ作り」や「七夕飾り」などを行い、大好評でした!

「RYOMA爛漫」で開催した「高知桂浜郵便局のご当地風景印で思い出を送ろう!」は、参加者がメッセージを書いた絵はがきに坂本龍馬像と当館(本館)が図案化された桂浜郵便局の風景印を押してお届けする、というもの。「ドイツに送りたい」という方や、お友達同士に來られて、お互いに届くように、とお気に入りをはがきを選びあう方など、みなさん思い思いに楽しんでおられたようです。

今後も、こうしたワークショップ会場など、多彩なイベント会場としても「海に見える・ぎゃらりい」を活用していきたいと考えています。窓から見える海の眺めとあわせてお楽しみください。

★「海に見える・ぎゃらりい」の上、中2階(休憩コーナー)からは、少し高い位置から海を眺めることができます。自動販売機のコーヒーを飲みながら海を眺める…ゆったりした時間を楽しめる”隠れスポット”です。さらに、屋上から眺める”土佐の海と空”は、まさに「絶景」です。



ワークショップの様子



中2階からの眺め

河村 章代

## 入館状況

2023年9月20日現在

(1991年11月15日開館以来 31年310日)

◆入館者数 4,586,077人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 649,317人

## 編集後記

当館は海に近く、視界が開けているので、天気の変化がよく分かります。好天の日は雲ひとつない青空と輝く海、嵐が近いと一面の曇天に強風、波立つ海。流れてゆく雲も、そのかたぢやスピードは日ごとに違い、朝と夕で違います。地球も呼吸をしていると感じるひとときです。

本号が発行される10月はすでに秋本番、空も美しい季節です。表紙の四字熟語「秋天一碧」は、そんな雲ひとつない秋の青空を表すことばです(か)。

館だより“飛騰”第127号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

発行日 2023(令和5)年10月1日

発行 公益財団法人高知県文化財団

高知県立坂本龍馬記念館

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015

http://www.ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 一般500円(企画展開催時700円)

高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで